

# ローカルでつながる新しい生活。

## 街と人がゆるくつながる ゆつたりのんびり温かな場所



郡山市在住 渡部景秋さん

■職 業 ゲストハウス運営、イベント企画  
 ■出 身 福島県郡山市西会津町 (直近は神奈川県相模原市)  
 ■趣 味 音楽(ライブ、Fes)旅行、飲み歩き

▼宿泊客と地域の人に参加するイベント



郡山市 01

▼源泉100%の大浴場



▲会津学鳳高校の学生が描いた壁画

郡山駅からおよそ17分、磐梯熱海温泉駅から1分の場所、営業中の「温泉がストハウス 湯の三」。源泉かけ流しの温泉付きゲストハウスとして築60年以上の旧旅館をリノベーションし、2019年4月にオープンし浴して。 「何度も日帰り入浴で磐梯熱海を利用して、泉質がとても好きだった。自分がやりたいゲストハウスを表現できる物件にここで出会えた事が移住のきっかけです」

前職のアパレル会社で販売や店舗管理などを担当していた渡部さん。「ネット販売の発展とともにモノを売る形の変化に疑問を持ち始めました。そんなとき旅行や仕事で利用した、ゲストハウスで体験した人と人の距離の近さやその魅力に興味を持ちようになりまして」とのこと。実際にゲストハウスを始め感じたことを尋ねると「自分の知らない世界や仕事の話が聞けたり、宿泊者同士や地域の方がバススペースで仲良くなる姿を見ると、この仕事の魅力を感じます」とのこと。宿泊客の半数が海外の方という日もあるそうです。

まちの魅力について「水が本当に美味しい。これにはびっくりです。あとはやっぱり温泉!! スベスベお肌になれる優しい泉質で小さいお子様でも入浴しやすい温泉だと思います」というようなものを見てきたからこそ感じる魅力を話してくれました。美人の湯で親しまれる磐梯熱海温泉の魅力に魅了されたようです。また、まちの人について「住民や旅館の方が交代で毎日足湯掃除をしていて、みんなで温泉街を作り上げているのだなと感じました。また、郡山市は新しく何かを始めるとこに協力的で働きやすい街だと感じています」と語ります。「定期的にイベントを開催しているので、宿泊者と地域の方が繋がることで新しい価値を発見してほしいです。将来、福島県への観光のハブになれるよう盛り上げていきたいです」

## 自然の中で豊かに暮らす。いちごも中心に季節が巡る。



鏡石町在住 太田啓詩さん

■職 業 いちご農家(初出荷に向け準備中)  
 ■出 身 福島県鏡石町 (直近は福島市、震災前は兵庫県)  
 ■趣 味 焚火

人を幸せにし、みんなを笑顔にする「いちご」に魅了された太田さん。2006年から外資系製薬会社に勤め、充実したサラリーマン生活を送ってききました。そんなとき、東日本大震災が発生。太田さんは兵庫県の会社のビルにいて、地震被害の様子をテレビでみていたと言います。

「震災時の東北の姿をみて、自分も近くで福島を見ておきたいという気持ちが大きくなり、福島への転勤を希望しました」

仕事や震災復興ボランティアへの参加等を通じてふるさとへの思いをさらに強めていきます。

「いちごってお祝いの時や日常の中にも存在していて、いつでもみんなを笑顔にしてくれる。そんなところがとても好きです」



▼トラックいっぱいのいちごの苗



鏡石町 03

培の経験を積むために、農園へ飛び込み、日々、色艶やへたのそり方、見極め、ピニールハウスの扱い方についてを学び、1日中いちごのことを考えている太田さん。

福島のお気に入りの場所について聞くと「鏡石町には、ふれあいの森公園があり、たくさんのアスレチックや遊具があって、親子で遊ぶのに最適な環境が整っています。あと郡山市の喫茶店「粒」は子供用の絵本が置いてあり、おいしいお菓子とコーヒーを飲みながら居心地よく過ごせます」と紹介してくれました。

今後について「いちごを中心としてコミュニティや人と人の繋がりを広げていきたい、そんな思いを「いちご家族」という名前に込めました。11月の初出荷に向けて、今はとてもモチベーション高く過ごしています」と笑顔で話す太田さん。

今年の2月にはクラウドファンディングに挑戦し、目標の120%以上で達成。一歩ずつ夢に向かって歩を進めています。最後に移住を考えている方へ「移住先に自分の夢があるならぜひそこに飛び込んでみるのも選択肢の一つだと感じています。難しいこともあるけど、わくわくすることや素敵な人との出会いが多くて、毎日を刺激的に充実させて過ごすことができます」と思っています。

## フードカートの煙に出現 地域と食もつながる!



須賀川市在住 佐藤聡さん

■職 業 会社員(起業準備中)  
 ■出 身 福島県須賀川市(直近は東京都三鷹市)  
 ■趣 味 合気道

福島の畑で青空の下、白いテーブルクロスを敷き、地元の食を存分に味わえる取り組み「FoodCamp」。その要として活躍する佐藤さん。「インスタ映えを狙っているかのように見えるかもしれませんが、その本質は生産者にスポットライトを当て世界に誇れる福島の人の魅力や食の豊かさに触れながら、自分の「食」を見つめなおす取り組みです。その場で採れる食材を地元一流シェフが料理する、食べた瞬間に脳天がしびれるような感動を是非体験してほしい」と話します。移住したきっかけについて「東京で福島出身の女性と結婚し、じゃあUターンしようかという自然の流れで移住を決めました。今は夫婦でゲストハウス開業の準備中ですが、収入の確保に悩みました」とのこと。そんなときに出会ったのがFoodCampを実施する「株孫の手トラベル」。



▲環境省グッドライフアワード受賞式



▲畑で一流シェフの料理を堪能



▲生産者の方と一緒に野菜選び

須賀川市 02

こおりやま広域圏内に移住した方に、この地域の魅力や生活について伺いました。

## ローカルに飛び込み新たな「創造」も生み出す!



田村市在住 大類日和さん

■職 業 起業型地域おこし協力隊、デザイナー  
 ■出 身 群馬県富岡市 (直近は東京都港区)  
 ■趣 味 焚火、スノーボード

群馬県生まれの大類さん。移住前は東京のWeb制作会社で働いていました。「大学で地域政策を学ぶ中で、地方でのフィールドワークを経験しました。その後就活のタイミングで自分のやりたいことを考えたときに、東京には住みたくなかった。どこでもできる仕事をしたいという2つが、自分の軸だと、そう気づきながら東京で1年ほど働き、やはり田舎に住みたいという思いは変わらず、田村市の地域おこし協力隊として活動を始めました。移住のきっかけは正直、なんとなくです。職場の共通の知り合いから声を掛けられ、なんとなく面白そうだったので、飛び込みました」と当時を振り返りました。

今はデザインと動画制作の仕事をする大類さん。「主に商業デザインですが、自分の持つ技術や知識で課題に向かい、それが解決目的が達成された時に大きな喜びを感じます」と話してくれました。「地方は若者が少なく、娯楽も少ない、それはどこでも抱えている問題です。それでも、地方の問題を解決するために立ち上がった若者たちがここにはいます。それが「テレワークセンター テラス石森」を運営する、一般社団法人「S.M.C」の方々です。新しい「創造」と「活動」の場所を整備し、田村市を盛り上げる、そのための拠点を作るための行動力。その想いに、とても良い驚きと刺激を受け、この人たちと一緒に働きたいと思いました。

まちの魅力について「田村市は街灯も少なく、霧が出ると本当に真暗。でも天気の良い日の夜は都会とは比べ物にならない、とても綺麗な星空が広がります。天候によりいろいろな表情を見せてくれる田村市のそんなところが好きです」と笑顔で話してくれました。最後に移住を考えている方に「言っせ一度、テラス石森に遊びに来てください。と、りあえず一緒に卓球でもしませんか?」



▲高校を活用したテレワークセンター「テラス石森」

テラス石森のスタッフ



▲大類さんが作成したデザイン